地域における予防・発見・発信機能のシステム構築への一考察

―児童虐待防止活動の実践より―

飯浜浩幸・小早川俊哉・西崎　毅・藤根　収
上原正希・杉本大輔・櫻井美帆子・大島康雄
吉江幸子・湯浅頼佳・西野克俊

星槎道都大学研究紀要

社会福祉学部

創刊号

2020 年

The Bulletin of Seisa Dohto University, Faculty of Social Welfare
No.1, 91－96, 2020

地域における予防・発見・発信機能のシステム構築への一考察

―児童虐待防止活動の実践より―

飯浜浩幸・小早川俊哉・西崎　毅・藤根　収
上原正希・杉本大輔・櫻井美帆子・大島康雄
吉江幸子・湯浅頼佳・西野克俊

この論文は過去にも報告してきたが，児童虐待防止の広報・啓発活動である「学生によるオレンジリボン運動」に取り組んだ星槎道都大学社会福祉学部の保育士・社会福祉士・精神保健福祉士・教員を目指す２年生40名の学生と教員11名の活動と，その教育効果を記したものである。

Ⅰ．学生によるオレンジリボン運動について

「オレンジリボン運動」は，子ども虐待防止のシンボルマークとしてオレンジリボンを広めることで，子ども虐待をなくすことを呼びかける市民運動であり，オレンジリボン運動を通して子どもの虐待の現状を伝え，多くの方に子ども虐待の問題に関心を持ち，市民のネットワークにより，虐待のない社会を築くことを目指している。

また「学生によるオレンジリボン運動」の，その目的は，近い将来親になりうる若者などに向けた児童虐待予防のための広報・啓発が主たる目標となっており，学園祭等を利用して学生が主体的に実施するもので，その活動内容は各校に委ねられている。当初，厚生労働省で主唱していたものであるが，平成27年度から，オレンジリボン運動の総合窓口を担う特定非営利活動法人児童虐待防止全国ネットワークが引き継ぎ実施している。

Ⅱ．本学におけるオレンジリボン運動について

本学は平成26年度より毎年開催している。先に記載した通り，オレンジリボン運動の活動内容は各校に委ねられているが，本学の活動内容については教員間で話し合い，令和元年度の本学活動については，社会福祉学部２年生を対象に，令和元年９月17日～20日の「夏季集中期間での授業」，10月28日の「北海道空知郡南幌町での活動」，11月19日の「北海道北広島市児童虐待防止講演会で作成した掲示物の展示及び参加」という３つの活動内容を企画した。

Ⅲ．「夏季集中期間での授業」について

大まかなスケジュールは表１を参照。以下４つの学びを形成した。

⑴　児童虐待についての講義

講義内容については，a．児童虐待とは，b．児童虐待の現状，c．児童虐待の類型，d．被虐待児の臨床像についての４項目について実施した。

⑵　オレンジリボン運動についての講義

講義内容については，a．オレンジリボン運動について，b．オレンジリボン憲章について，c．オレンジリボンの意味，d．オレンジリボンの自治体・企業活動について，e．学生がオレンジリボン活動をおこなう意義，f．本学のオレンジリボン活動についての６項目について実施した。

⑶　学生の手作りオレンジリボンの作成

児童虐待防止全国ネットワークのホームページに掲載されている「自分で作れる手作りリボン」の情報を参考にしながら，マスコットを付したオリジナルリボンの作成をした。

⑷　児童虐待についてグループ学習

40名の学生を概ね４つのグループに分け，a．児童虐待とは，b．被虐待児童の臨床像について，c．児童虐待の類型について，d．オレンジリボン憲章について，各グループに１テーマを振り分け，模造紙にまとめ，その後，児童虐待防止のポスターも作成，授業内で発表会をした。

Ⅳ．北海道空知郡南幌町での活動について

令和元年10月28日に北海道空知郡南幌町でイベント

【表 1】スケジュール

開　催　日	講　時	時　　間	コ　マ	内　　容
9 月 17 日(火)	1	9：00～10：30	1	・オリエンテーションと事前アンケート調査 ・オレンジリボン活動とは
	2	10：40～12：10	2	・児童虐待について（特定相談支援事業所　職員）
	3～4	12：55～16：05	3～4	・面接技術の VTR 学習と OSCE のポイント
9 月 18 日(水)	1～2	9：00～12：10	5～6	・オレンジリボン作成
	3～4	12：55～16：05	7～8	・図書館で調べ物と整理 ・掲示物作成（模造紙）
9 月 19 日(木)	1～4	9：00～16：05	9～12	・掲示物作成（模造紙） ・掲示物作成（ポスター）
9 月 20 日(金)	1	9：00～10：30	13	・掲示物作成（ポスター） ・発表準備
	2	10：40～12：10	14	・掲示物について発表と総括 ・掲示物を学内に掲示

※15 コマ目は北広島市で開催される児童虐待防止講演会に学生が参加，掲示物展示．事後アンケート実施．

学生の手作りオレンジリボンの作成

各グループ，作成した模造紙・ポスターを発表

を開催した際に会場に掲示し，オレンジリボンの配布も
実施した。

南幌町のイベント会場で掲示物の展示とオレンジリボンの配布を実施

児童虐待防止講演会での掲示物の展示

Ⅴ．北広島市要保護児童対策地域協議会主催（北広島市主催）の児童虐待防止講演会への学生の参加と掲示物の展示

令和元年 11 月 19 日に北広島市芸術文化ホールで開催された児童虐待防止講演会に学生が参加し，授業で作成した掲示物の展示を行った。

Ⅵ．オレンジリボン実施後の学生へのアンケート

この児童虐待防止活動の一つであるオレンジリボン活動を実施するにあたり授業開始前と，授業終了後にアンケートを実施した。

アンケートの項目については，Q 1.「オレンジリボン運動を授業前から知っていたか」，Q 2.「Q 1 で知っていたという学生はなぜ知っていたのか」，Q 3.「児童虐待を防止するには，どのような活動が必要だと思うか」の３項目とし，活動終了後，再度，Q 3 について質問し，授業・活動前と活動後の変化について明らかにし，本学で活動した実践内容がどのような効果を及ぼしたのかを考察した。授業及びアンケート対象者数は 40 名であったが，アンケートの有効回答数は 36 名であった。

【事前アンケート】

Q 1. オレンジリボン運動を授業前から知っていたか。

項　目	総数	%
知っていた	27 名	75%
初めて知った	9 名	25%
合計	36 名	100%

「知っていた」27 名（75%），「初めて知ったが」9 名（25%）であった。

「知っていた」と答えた学生については，Q 2 の質問を答えてもらった。

Q 2. Q 1 で「知っていた」という学生はなぜ知っていたのか。

当てはまるものに１つ答えなさい。

項　　目	総数	%
①学内で取り組んでいたことで知っていた	15 名	55.6%
②テレビの情報で知っていた	1 名	3.7%
③居住している地域活動で知っていた	0 名	0%
④授業の中で学び知っていた	9 名	33.3%
⑤その他	2 名	7.4%
合計	27 名	100%

「学内で取り組んでいたことで知っていた」が 15 名(55.6%),「授業の中で学び知っていた」が 9 名(33.3%),「その他」は 2 名（7.4%）で，その他の意見では「母親が話してくれた」「オープンキャンパスで知った」であった。その次には「テレビの情報で知っていた」が 1 名(3.7%),「居住している地域活動で知っていた」が 0 名（０%）であった。

学内で継続して活動していることが，周知されて，早期の理解につながっていることが理解できた。

Q 3. 児童虐待を防止するには，どのような活動が必要だと思うか。
下記項目を重要なものから，それほど重要でないものまで順番をつけなさい。
（　）→（　）→（　）→（　）→（　）→（　）

順　位	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位	
①親の子育て強化	10	10	2	3	10	1	36
②社会で支える・発見する取り組み強化	11	11	9	4	1	0	36
③行政の子ども・親などの検診などの強化	4	6	12	8	6	0	36
④児童相談所の機能強化	4	6	8	15	3	0	36
⑤社会へのソーシャルアクション	7	2	4	6	15	2	36
⑥その他	0	1	1	0	1	33	36
	36	36	36	36	36	36	

【事後アンケート】

Q 1. 児童虐待を防止するには，どのような活動が必要だと思うか。

順　位	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位	
①親の子育て強化	4	6	15	10	1	0	36
②社会で支える・発見する取り組み強化	11	13	7	3	2	0	36
③行政の子ども・親などの検診などの強化	1	2	6	15	7	5	36
④児童相談所の機能強化	5	5	0	2	24	0	36
⑤社会へのソーシャルアクション	15	8	6	4	2	1	36
⑥その他	0	2	2	2	0	30	36
	36	36	36	36	36	36	

Ⅶ. オレンジリボン活動の実施前と実施後の変化

事前アンケートで,「児童虐待を防止するには，どのような活動が必要だと思うか」という質問に対して，優先順位の高い順から「社会で支える・発見取り組み強化」⇒「親の子育て強化」⇒「行政の子ども・親などの検診などの強化」⇒「児童相談所の機能強化」⇒「社会へのソーシャルアクション」⇒「その他」の順であった。その他について,「親の認識強化」「町内会等の付き合い強化」「再犯防止」「法律強化」「親のストレス軽減」である。特徴としては，子どもを支える対象を「社会」と「親」であるという認識は強く，しかし社会や親に対するアクションへの取り組みへの認識は薄く，他人事という感覚。

授業，講演会でのアクションなど，全ての授業が終了した後，事後アンケートでも上記同様の質問を実施したが,優先順位の高い順から「社会へのソーシャルアクション」⇒「社会で支える・発見する取り組み強化」⇒「親の子育て強化」⇒「行政の子ども・親などの検診などの強化」⇒「児童相談所の機能強化」⇒「その他」の順であり，その特徴と事前アンケートからの変化については，社会や親が子どもを支えるために強化することは大切であるという認識の変化はないものの，その社会や親に働きかける大切さが認識されたことが伺い知れる。

この活動を実施したことで，児童虐待防止をするためには支える側へのソーシャルワークにおける発信機能（ソーシャルアクション）の大切さを理解し，意識強化への変化が醸成された。

Ⅷ. おわりに

星槎道都大学における「学生によるオレンジリボン運動」には学生 40 名と学部教員 11 名が 9 月から 11 月まで関わった活動であった。北広島市の児童虐待防止講演会には学生と教員が，授業で作成した掲示物を展示，講演会の準備や後片付けまで含め参加し，参加した一般市民，民生委員，人権擁護委員，小中学校教員など 200 名程に学内のみならず多くの市民に発信できた，また学生のソーシャルアクション能力醸成にも役立った。今後共この活動も継続していく必要性を改めて感じさせられた。

参考文献

特定非営利活動法人児童虐待防止全国ネットワーク
（http://www.orangeribbon.jp/　2019.12.10）

児童虐待防止講演会で記念撮影

謝辞

最後に学生の作成した掲示物を快く児童虐待防止講演会の会場に展示をさせていただきました北広島市保健福祉部の職員の方々には心から感謝申し上げます。児童虐待がなくなることを願い，そしてこの研究がより深めていけることを祈り，末尾の言葉とさせていただきます。本当にありがとうございました。

A case study for the establishment of a system to prevent, discover, and reveal

― from the implementation of children abuse prevention activities

IIHAMA Hiroyuki　KOBAYAKAWA Toshiya　NISHIZAKI Takeshi　FUJINE Osamu
UEHARA Masaki　SUGIMOTO Daisuke　SAKURAI Mihoko　OOSHIMA Yasuo
YOSHIE Sachiko　YUASA Yorika　NISHINO Katsutoshi

Abstract

A second-year student at the Department of Social Welfare at Seisa Dohto University has held an Orange Ribbon campaign as one of the activities for child abuse prevention. Surveys were conducted before and after the lessons, and an awareness of the social actions of social workers to prevent child abuse has been reported to have increased through this activity.